慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	第二言語獲得者による省略構文の獲得と獲得過程
Sub Title	Argument/VP-Ellipsis in second language acquisition
Author	桃生, 朋子(Mono, Tomoko)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2012
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.73 (2012.) ,p.1- 14
JaLC DOI	
Abstract	This study investigates how L2 learners acquire ellipsis and, particularly, what kind of input in a target language serves as a trigger for the acquisition of ellipsis. According to Oku (1998), argument ellipsis is permitted in languages like Japanese but not in languages like English. To account for this cross-linguistic difference, he proposes that the parameter of a verb's θ-feature strength governs both the type of ellipsis and the availability of scrambling. Based on this parameter, it is assumed that the input of scrambling in a target language serves as a trigger for parameter resetting. If so, L2 learners with the knowledge of ellipsis also have the knowledge of scrambling, but the converse is not true. 21 adult L2 learners who were never taught the ellipsis in their target language were tested. They were asked to judge the elliptical sentences and scrambled sentences in each target language through the picture judgment task and acceptability task, respectively. The results show that while all the participants who passed in the ellipsis condition also passed in the scrambling condition, not all the participants who passed in the scrambling condition passed in the ellipsis condition. These findings indicate that the input of scrambling in a target language is a necessary but not a sufficient trigger for parameter resetting.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000073-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

第二言語獲得者による省略構文の獲得と獲得過程
Argument/VP-Ellipsis in Second Language Acquisition

桃　生　朋　子*
Tomoko Monou

This study investigates how L2 learners acquire ellipsis and, particularly, what kind of input in a target language serves as a trigger for the acquisition of ellipsis. According to Oku (1998), argument ellipsis is permitted in languages like Japanese but not in languages like English. To account for this cross-linguistic difference, he proposes that the parameter of a verb's θ-feature strength governs both the type of ellipsis and the availability of scrambling. Based on this parameter, it is assumed that the input of scrambling in a target language serves as a trigger for parameter resetting. If so, L2 learners with the knowledge of ellipsis also have the knowledge of scrambling, but the converse is not true.

21 adult L2 learners who were never taught the ellipsis in their target language were tested. They were asked to judge the elliptical sentences and scrambled sentences in each target language through the picture judgment task and acceptability task, respectively.

The results show that while all the participants who passed in the ellipsis condition also passed in the scrambling condition, not all the participants who passed in the scrambling condition passed in the ellipsis condition. These findings indicate that the input of scrambling in a target language is a necessary but not a sufficient trigger for parameter resetting.

1.　はじめに

本研究の目的は，第二言語（以下，L2）[1] 獲得[2] モデルを，言語理論および実験データに基づき明らかにるすことである。より具体的な研究課題を提示するにあたり，まず本研究で仮定するL2獲得過程のモデル（White 2003）を（1）に示す。

（1）L2の言語情報（入力）→ 内的仕組み → L2の文法知識（出力）

* 慶應義塾大学社会学研究科教育学専攻後期博士課程

（1）は，L2を獲得途中の人（以下，L2獲得者）が外界から取り込み得るL2の言語情報が入力となり，それによって何らかの内的仕組みが機能する結果，L2の文法知識が出力となる，という獲得過程モデルである。このモデルを仮定すると，まず問いとして挙げられるのは，「入力と出力を繋ぐ内的仕組みとは何か」である。この問いに答えるべく，まずL2獲得の特徴を概観する。そしてそこから導き出される内的仕組みの候補を明らかにする。

母語獲得との比較の観点から述べられるL2獲得の特徴として，例えばL2を獲得途中の人（以下，L2獲得者）は，母語の知識をすでに獲得，または獲得途中であり，母語の知識がL2獲得に影響を及ぼす転移が起こり得ること，母語獲得のように獲得が完全に達成される場合が少ないこと，成功度に個人差があることなどが挙げられる（桃生 2009）。これらの相違点のみに基づき，Bley-Vroman（1990; 2009）やSchachter（1990）などでは，L2獲得は母語の知識や，類推や一般化などの一般的知識獲得機構に基づいてなされると述べている。つまり，冒頭で挙げた問いに含まれる内的仕組みの候補として，一般的知識獲得機構が挙げられる，ということである。

しかしその一方で，母語の知識や，外界から取り込み得る言語情報からは導き出されない文法知識を，L2獲得者が持っていることが報告され，L2獲得を支える内的仕組みの中に，母語獲得で仮定される生得的言語知識（e.g. Otsu 1981; Crain 1991; Crain and Thornton 1998など）の機能が含まれる，という主張もある（Schwartz and Sprouse 1996; White et al. 1996; Song and Schwartz 2009など）。L2獲得において，生得的言語知識が機能するかどうかを見極めるためには，調査対象となる目標言語の言語現象が，母語と同じ形式で顕在化しておらず，また経験や教授，および一般的知識獲得機構からは導き出せないものである必要がある。その上でもしL2獲得者が獲得した言語が個別言語の制約に従っているならば，L2獲得においても生得的言語知識が機能することが示唆される。この点について，Song and Schwartz（2009）をもとにより詳しく説明する。

Song and Schwartz（2009）では，（2）に挙げた韓国語の疑問文を用い，英語を母語とするL2獲得者による（2a）および（2b）の解釈について，調査している。

（2）　a.　Amwuto　**mwues-ul**　sa-ci　anh-ass-ni?
anyone　*what-ACC*　*buy-ci*　*NEG-PAST-Q*
‘Didn’t anyone buy something?’（‘What didn’t anyone buy?’の解釈はない）

b.　**Mwues-ul**　amwuto　sa-ci　anh-ass-ni?
what-ACC　*anyone*　*buy-ci*　*NEG-PAST-Q*
‘What didn’t anyone buy?’

韓国語では（2a）のように，目的格（ul ‘*ACC*’）を伴った要素（mwues-ul ‘*what-ACC*’）が主語（amwu-to ‘*anyone*’）の後，つまり文頭にこなければ，Yes-No 疑問文の解釈が付与される。一方（2b）のように，mwues-ul ‘*what-ACC*’ が文頭にある場合は，What 疑問文の解釈が付与される。英語では，目的格を伴った要素を文頭に移動させることは許されず，したがって，語順の違いに帰する解釈の違いもない。このような文法知識は，英語の文法知識からも，また一般的知識獲得機構からも導き出せない知識である。実験の結果，英語を母語とするL2獲得者が（2a）と（2b）の解釈の違いを正しく理解してい

たことがわかった。そのためSong and Schwartz（2009）では，L2獲得者が授業や教科書を通じて取りこみうる言語情報からは，実際に獲得する抽象的で複雑なL2の文法知識は導き出されない[3]とし，L2獲得にも生得的言語知識が機能する，と結論付けている。つまり，冒頭で挙げた問いに含まれる内的仕組みの候補として，生得的言語知識が考えられ得る，ということである。

以上二つの対立する議論を基に，一つ目の課題として，(3) を挙げる。

(3) 研究課題①

母語獲得において仮定される生得的言語知識が，L2獲得においても機能するのか

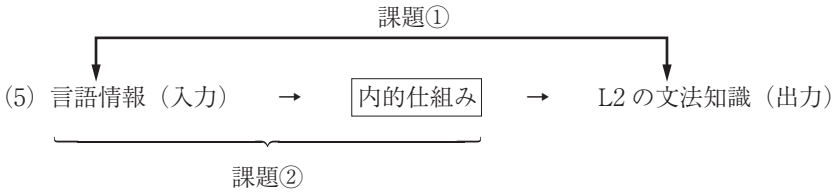
(1) の獲得モデルを過程した上で，もし課題①の答えが「機能する」のだった場合，次の課題となるのが，(4) である。

(4) 研究課題②

課題①の答えが「機能する」の場合，「入力と出力を繋ぐ内的仕組み」を活性化させる言語情報は何か

母語獲得の場合，生得言語知識だけでは，子どもが目標言語の文法を獲得するには至らない。言語獲得は，生得的言語知識と，外界から取り込みうる言語情報との相互作用により為される。このことは，1歳数カ月から約13歳に至るまで，不幸にして外界との接触を断たれたジーニー（Curtiss 1977）の例を思い浮かべれば，容易に想像できるだろう。したがって，(1) の獲得モデルを仮定し，L2獲得の内的仕組みを明らかにするにあたり，課題②に取り組むことは必須である。そして課題①および②は，母語獲得との相違点が生じる原因をも明らかにし得る重要な課題である。

最後に，(1) のモデルと課題とをまとめて図示したものを，(5) に示す。



まず課題①では，入力としての言語情報と，出力としてのL2の文法知識に質的な隔たりがあるかどうかを検討することで，課題に対する答えを導き出す。課題②では，課題①に対する答えを基に，どの言語情報が生得的言語知識の活性化に必要なのかを明らかにする。以上二つの課題に取り組むことで，L2獲得の過程を明らかにする。

これらの課題に取り組むために，本論文では日本語および英語の省略構文を用い，L2獲得者が省略構文に関する文法知識をどのように獲得するのかを検討する。次節では課題①を取り上げ，まず省略構文に関する文法知識獲得に必要な生得的言語知識を，言語理論，および母語獲得研究の成果をもとに明らかにする。そしてL2獲得の実験結果により，「L2獲得には生得的言語知識が機能する」ことを主張する。3節では課題②を取り上げ，まず2節で明らかになった生得的言語知識の機能に必要な言語情報

を，言語理論に基づき明確にする。さらにかきまぜ構文の情報が必要な言語情報になりうることを，実験データをもとに主張する。4節では本研究の意義をまとめる。最後に5節で問題点を指摘し，今後取り組むべき課題を述べる。

2.　研究課題①：L2獲得における生得的言語知識の機能の可能性

本節では，課題①に取り組む。まず2.1.では，本研究で扱う日本語と英語の省略構文を取り上げ，日本語と英語における解釈の違いが，言語理論上どのように説明されるのかを，Oku（1998）に基づき説明する。続く2.2.では，2.1.で取り上げた省略構文を，日本語を母語とする子どもがどのように身につけるかを，Sugisaki（2007; 2009）を参照しながら考察する。そして，2.1.で取り上げた省略構文の解釈の違いを獲得するためには，生得的言語知識が必要であることを示す。2.1.および2.2.での議論を踏まえ，2.3.では，L2獲得者による省略構文の文法知識の獲得について調査し，課題①に対する答えを導く。

2.1.　名詞句省略（日本語）と動詞句省略（英語）

本研究で扱う日本語と英語の省略構文を，それぞれ（6），（7）に挙げる。aは先行文であり，その後にbの省略構文が続くとする。

（6）　a.　ビルは車を丁寧に洗ったが，
　　b.　ジョンは ____ 洗わなかった。
（7）　a.　Bill washed the car carefully, but
　　b.　John didn't ____.

（6b）と（7b）では優先される解釈に違いがある。（6b）は「ジョンは車を一切洗わなかった」が優先されるが，（7b）は「ジョンは車を丁寧には洗わなかった」という解釈が優先される。このような（6b）と（7b）の解釈の違いは，省略される句の違いにより生じる。日本語の場合，名詞句「車を」が省略されているが，英語の場合，動詞句 'wash the car carefully' が省略されている。ではなぜこのような違いが生じるのであろうか。まず日本語について述べる。

（6b）の解釈は「ジョンは車を一切洗わなかった」となるので，（6b）を解釈する際，____には「車を」が補われる。したがって，（6b）は名詞句が省略されていることになる。このことは，（8b）のように日本語で主語省略が許されることからも説明できる

（8）　a.　メアリーは［自分の提案が採用されると］思っている。
　　b.　ジョンも［ ____ 採用されると］思っている。

Oku（1998: 300）

（8b）の省略部分____は，「メアリーの提案が」とも「ジョンの提案が」とも解釈できる。後者の解釈は，省略部分に「自分の提案が」を補うことにより生じる。この点も，日本語は名詞句省略が可能であることを裏付ける証拠となる。

一方英語の場合，（7b）の解釈は「ジョンは車を丁寧には洗わなかった」となるので，（7b）の____

には ‘wash the car carefully’ が補われると考えられる。したがって（7b）は名詞句省略ではなく，副詞句を含んだ動詞句の省略として分析される。

以上の言語間の違いは，各々の言語がもつ動詞の素性の強さにより説明される。日本語タイプの言語では動詞の素性が弱く，形式の段階で動詞と目的語である名詞句が近い位置に生成される必要はない。したがって（6b）や（8b）で示したように，解釈の段階で名詞句のみが補われても構わない。一方，英語タイプの言語では動詞の素性が強く，名詞句（目的語）は形式の段階でも解釈の段階でも動詞と近い位置で生成されなければならない。したがって解釈の段階で名詞句のみが補われることは許されず，（7b）で示したように，必ず動詞句と名詞句の両方が補われることになる。

2.2.　母語獲得からの証拠

本節では，2.1で明らかになった日本語の省略構文を説明する知識を，日本語を母語とする子どもはどのように獲得するのかを考察する。そのことにより，省略構文の解釈を導くための知識は生得的であることを主張する。

もし省略構文を説明する知識が生得的であれば，日本語を母語とする子どもは，獲得の早い時期から日本語の目的語省略構文を正しく解釈できることが予測される。この予測に基づき，Sugisaki（2007）では以下の刺激文を用いて実験を行っている。

（9）　a.　　リスさんが自分の絵本を読んでいるよ。
　　b.　　ゾウさんも＿＿読んでいるよ。
　　c.　　ゾウさんも**それ**を読んでいるよ。

（9b）の解釈には，「ゾウさんも，ゾウさんの絵本を読んでいるよ」という解釈が含まれる。つまり，（9a）にある名詞句「自分の絵本」が，省略されている。このことは，（9c）には「ゾウさんも，リスさんの絵本を読んでいるよ」の解釈しかないことと対比すると，より明らかである。Sugisaki（2007）では，（9b）と（9c）の解釈の違いを，日本語を母語とする子どもが理解しているかどうかを調べるべく，日本語を母語とする10人の子ども（平均年齢4歳5カ月）に対し真偽値判断課題を用いて実験を行った。その結果，子どもは（9b）における「ゾウさんも，ゾウさんの絵本を読んでいるよ」という解釈の90%を容認し，（9c）における「ゾウさんも，ゾウさんの絵本を読んでいるよ」という解釈の85%を不適格と判断した。この結果に基づくと，省略構文を説明する知識が生得的であると言える。またSugisaki（2009）では，子どもの主語省略構文の獲得について調査しているが，この実験においても，3-4歳の子どもが主語省略構文をきちんと理解していることが示された。[4),5)] つまり，生後間もなくして，すでに日本語の省略構文の知識を持っている，ということである。このことから，省略構文の知識は，生得的言語知識であると考える。

2.3.　L2獲得実験

2.1.および2.2.の議論に基づき，本節では，省略構文に関する知識の，L2獲得に対する予測を立てる。そして，その予測を検証するために行った実験について報告する。

Oku（1998）に基づく省略構文に関する知識は，授業等で明示的に教授される内容ではない。また，

（6b）と（7b）の解釈の違いは一見しただけでは分からない。さらに，省略構文の獲得にかきまぜ構文の知識が影響していることは，表面的な語順等の情報のみからでは予測できない。したがって，一般化や類推などの一般的知識獲得機構や，母語の知識を利用しただけでは，（6b）と（7b）の解釈の違いは導き出されない。そしてSugisaki（2007; 2009）の実験結果に基づくと，省略構文に関する文法知識の獲得には，生得的言語知識が関与していると考えられる。以上のことから，L2獲得による省略構文の知識について，以下の予測が立てられる。

（10）予測

a. もしL2獲得に生得的言語知識が機能していれば，L2獲得者は目標言語の省略構文に正しい解釈を付与できる

b. もしL2獲得に生得的言語知識が機能していなければ，L2獲得者は目標言語の省略構文に正しい解釈を付与できない

この予測を検証すべく，日本語を母語とする英語獲得者8名（日本で英語を学んでいる大学生・大学院生，日本での英語学習期間：7年～18年）と，英語を母語とする日本語獲得者13名（日本で日本語を学んでいる大学生，日本での日本語学習期間：半年～4年）の，計21名を被験者とし，実験を行った。

実験では以下の種類の刺激文[6]を用意し，絵課題を用いて調査した。絵課題では，（12）の絵を二つずつ組み合わせて，（i）太郎は静かに本を読んでいるが，花子は本を読んでいない，または（ii）太郎は静かに本を読んでいるが，花子は本を静かには読んでいない，という状況を示す絵のセットを用意し，それぞれのセットが刺激文を正しく説明しているかどうかを判断させた。

（11）刺激文

a. Taro read the book quietly, but Mr. Tanaka didn't read.
たろうは本を静かに読みましたが，たなかさん（/すずきさん）は読みませんでした。

b. Taro read the book quietly, but Mr. Suzuki didn't do so.
たろうは本を静かに読みましたが，たなかさん（/すずきさん）はそうしませんでした。

（12）絵

刺激文（11a）についての実験結果を，以下の表1・2にまとめた。まず全体の容認率を表1にて示す。特に重要な点は，英語を母語とする日本語獲得者が，「一切読まなかった」の解釈を，日本語の省略構文に付与することができるかどうかと，日本語を母語とする英語獲得者が，「静かには読まなかった」の解釈を，英語の省略構文に付与することができるかどうか，の2点である。表1において，前者の点

表1　容認率

	‘静かには読まなかった’	‘一切読まなかった’
実験条件		
日本語獲得者（母語＝英語）	10.0%	97.5%
英語獲得者（母語＝日本語）	55.0%	60.0%
統制条件		
日本語母語者	7.5%	97.1%
英語母語話者	100%	100%

表2　正答率80%以上の被験者数（人）

	‘静かには読まなかった’	‘一切読まなかった’
母語＝英語（L2= 日本語）	7/8	8/8
母語＝日本語（L2= 英語）	4/13	6/13

については容認率が97.5%であり，大部分の日本語獲得者が，正しい解釈を付与していることがわかる。一方後者については容認率が55.0%であり，チャンスレベルであることがわかる。

続いてそれぞれの解釈について，正答率が80%以上であった被験者数を表2で示す。
上述した重要点についてみると，英語を母語とする日本語獲得者全員（8/8）が「一切読まなかった」の解釈を，日本語の省略構文に付与しており，日本語を母語とする英語獲得者の4/13名は，「静かには読まなかった」の解釈を，英語の省略構文に付与している。

以上の実験結果から，少なくとも表2の8/8および4/13の被験者によるL2獲得には，生得的言語知識が機能している，と考えられる。

3.　研究課題②：生得的言語知識の機能に必要な言語情報

本節は，以下のように構成される。まず，2.1.で見た省略構文と，同じ内的仕組みにより解釈されるかきまぜ構文を取り上げ，この構文がどのように分析されるのかを3.1.で概観する。この分析に基づき，3.2.では省略構文の獲得過程を導く。3.3.では，3.2.で提案した獲得過程を検証すべく行った実験について報告する。

3.1.　省略構文とかきまぜ構文

Oku（1998）によれば，省略構文が名詞句省略構文として分析される日本語のような言語では，（13b）のようなかきまぜ構文も許される。（13b）のかきまぜ構文では，埋め込み文の直接目的語「その本を」が，埋め込み文の主語よりも構造上高い位置に生成されている。

（13）a.　ビルが［メアリーがジョンに**その本を**渡したと］思っている。
　　b.　ビルが［**その本を**メアリーがジョンに渡したと］思っている。

かきまぜ構文が可能な言語と不可能な言語の違いは，その言語の動詞がもつ素性の強さの違いと関連している（Boškovič and Takahashi 1998）。つまり，かきまぜ構文を説明する内的仕組みは，一見すると

かきまぜ構文とは関連のないように見える省略構文を説明する内的仕組みと同じ，ということである。日本語のようにかきまぜ構文を許す言語では，動詞の素性が弱く，形式の段階において名詞句が必ずしも動詞と近い位置に生成される必要はない。したがって，（13b）にあるように「その本を」が動詞「渡した」と構造上離れた位置に生成されても構わない。一方英語のような言語では動詞が持つ素性が強く，目的語である名詞句は，形式の段階において動詞と近い位置に生成される必要がある。したがって（13b）のようなかきまぜ構文（e.g. That book Bill thought that Mary passed John.）は許されない。

また，母語獲得研究において，Oku（1998）を裏付ける証拠が提示されている。日本語を母語と子どもは，3–4歳までにはかきまぜ構文についての知識を身につけていることが報告されている（Otsu 1994）。この報告と，Oku（1998）による分析に従うと，3–4歳の子どもは，すでに日本語の目的語省略構文を正しく解釈できることが予測される。Sugisaki（2007）ではこの予測を検証すべく，2.2.で述べた被験者に対し実験を行い，日本語のかきまぜ構文の獲得時期と，目的語省略構文の獲得時期が同じであることを報告している。このから，Sugisaki（2007）では，Oku（1998）の主張は妥当性が高く，かきまぜ構文と目的語省略構文を説明する仕組みは密接に関連している，と結論付けている。

以上の議論に基づき，次節では省略構文の獲得にかかわる言語情報と，内的仕組みを明確にする。そしてL2獲得に対する予測を述べる。

3.2.　省略構文の獲得過程についての予測

Oku (1998)によれば，動詞の素性の強弱が，ある言語において名詞句省略構文が許されるのか，または動詞句省略構文が許されるのかを決定する。そしてこの素性の強弱は，かきまぜ構文を許すか否かをも決める。さらに，Sugisaki（2007）により，子どもによる名詞句省略構文の獲得時期と，かきまぜ構文の獲得時期が同じであることがわかった。したがって，動詞の素性の強弱を決定する言語情報の候補として，かきまぜ構文の情報か，あるいは省略構文の情報の二つが考えられる。かきまぜ構文は，省略構文と比べ形式上判断しやすく，使用頻度が高いため，獲得者が言語情報として取り込む可能性が高い。このことから，動詞の素性の強弱を決定する言語情報として，本研究ではかきまぜ構文の情報を仮定し，（14）の省略構文の獲得過程を提案する。

（14）言語情報：　→　動詞がもつ素性の強さ {強, 弱}　→　L2 の文法知識：
かきまぜ構文 {なし, あり}　　省略構文 {動詞句省略（英語）, 名詞句省略（日本語）}

日本語を母語とする英語獲得者が省略構文を獲得する場合，まず「英語ではかきまぜ構文が許されない」という否定証拠[7] が必要である。その入力をもとに，英語の動詞の性質が強い方に設定され，省略構文に動詞句省略の解釈を付与することが可能になる。一方英語を母語とする日本語獲得者の場合，「日本語ではかきまぜ構文が許される」という肯定証拠[8] が得られると，その入力をもとに動詞の性質が弱い方に設定され，省略構文に名詞句省略の解釈を付与することが可能になる。このような過程は，母語の性質や外界から取り込み得る言語情報，さらに一般的知識獲得機構のみでは説明できない性質を反映したものである。

したがって，もしL2獲得者が（5）の過程に従っていた場合，(i)目標言語でかきまぜ構文が許されるかどうかの知識を持っているL2獲得者は，必ず目標言語の省略構文の知識も持っている，（ii）目標言語でかきまぜ構文が許されるかどうかの知識を持っていないL2獲得者は，目標言語の省略構文の知識も持っていない，（iii）目標言語の省略構文の知識を持っていないL2獲得者で，かきまぜ構文の知識を持っている獲得者はいない，ということが予測できる。

3.3.　L2獲得実験

被験者は，2.3.で報告した実験の被験者と同じである。

実験では文法性判断課題として，以下の種類の刺激文を用意した。この課題では，刺激文とその状況を示す絵をセットで提示し，絵を説明する文として自然かどうかを判断させた。

（15）基本語順文

Kumi thought that [Takeshi pushed Emi].
くみは［たけしがえみを押した］と思った。

（16）かきまぜ構文1

*Kumi thought that [Takeshi Emi pushed].[9)]
*くみは［たけしが押したえみを］と思った。

（17）かきまぜ構文2

*Kumi thought that [Emi Takeshi pushed].
くみは［えみをたけしが押した］思った。

（18）絵

かきまぜ構文を用いた実験結果と，前節で報告した省略構文を用いた実験結果をあわせて表3にまとめる。

実験の結果，省略構文の知識を持つ獲得者の多くは，かきまぜ構文の知識を持つが，かきまぜ構文の知識を持つ獲得者が，必ずしも省略構文の知識を持つとは言えないことがわかった。したがって，かきまぜ構文の知識は，省略構文の知識獲得にとって必要な言語情報ではあるが，それだけが入力となり省略構文の知識を獲得するとは限らず，複数ある必須言語情報のうちの一つとして捉えられ得る。

表3　総合結果

かきまぜ構文	省略構文	被験者数（人）	
		母語＝日本語（L2＝英語）	母語＝英語（L2＝日本語）
PASS	PASS	4/13	3/8
FAIL	PASS	0/13	2/8[10]
PASS	FAIL	7/13	1/8
FAIL	FAIL	2/13	2/8

“PASS”：正答率80%以上
“FAIL”：正答率80%以下

4.　まとめ

本研究では，L2獲得の獲得過程を明らかにすべく，以下の二つの課題に取り組んだ。

(19) 研究課題

① 母語獲得において仮定される生得的言語知識が，L2獲得においても機能するか

② 課題①の答えが「機能する」の場合，「入力と出力を繋ぐ内的仕組み」を活性化させる言語情報は何か

課題①については「機能する」という答えが得られ，課題②については「省略構文を獲得するための必要条件の一つとして，かきまぜ構文の情報が挙げられる」という答えが得られた。

また，本研究の意義は以下の2点にまとめられる。第一に，本研究では，獲得に関わる言語情報や内的仕組みについてできるだけ具体的な提案をしたことで，省略構文の獲得ついて，以下の三つの提案が可能となった。(i) 省略構文の獲得には段階がある，(ii) 日本語タイプの言語を母語とする獲得者が英語タイプの省略構文を獲得する際，英語ではかきまぜ構文が許されない，という否定証拠が必要である，(iii) 英語タイプの言語を母語とする獲得者が日本語タイプの省略構文を獲得する際，日本語ではかきまぜ構文が許される，という肯定証拠が必要である。提案した獲得過程，および実験には問題点（次節参照）が残るものの，上記の提案は，省略構文に関する文法知識について，効果的教授法や学習法を探る上での判断材料の一つとして捉えられ得る。特に (ii) については，獲得者が否定証拠を利用できる可能性を示した，という点において重要な提案と言える。

第二に，本研究の成果が今後，省略構文を扱ったL2獲得理論の進展に貢献する，という点である。省略構文を扱ったL2獲得研究はあるものの（e.g. Duffield and Matsuo 2009），本報告書で扱ったような，先行文の解釈がそのまま反映されるとは限らない省略構文を扱ったL2獲得の先行研究は，筆者の知る限りこれまで報告されていない。音形を持たない要素を，L2獲得者がどのように獲得するのか，もしくはできないのか，明らかにすることは，L2獲得の全体的な仕組みを探るうえで，価値ある示唆を与える。

5.　問題点と課題

本節では本研究の問題点を大きく二つ挙げる。一つは（14）に示した獲得過程に関する問題，もう一

つは実験に使用した刺激文に関する問題である。以下では各問題の詳細を述べ，各々に対する解決案についてまとめる。

5.1.　省略構文の獲得過程

まずは（14）に挙げた獲得過程の妥当性を，日本語の省略構文の解釈を再検討することにより，検証する。

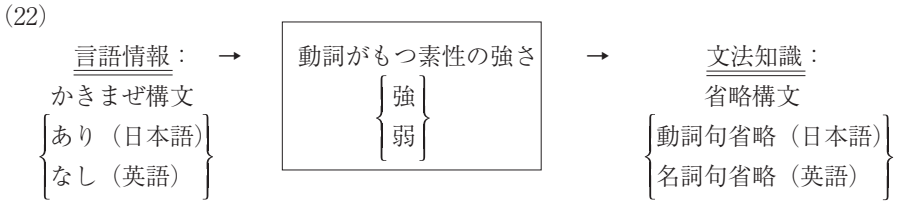
実験で使用した刺激文の解釈には優先性があり，(20b)の刺激文の解釈として，(21)の二つが可能な日本語母語話者もいる。

(20) a.　太郎は車を丁寧に洗った。
　　b.　花子は＿＿洗わなかった。

(21) a.　花子は車を一台も洗わなかった
　　b.　花子は車を丁寧には洗わなかった

このことから，日本語は名詞句省略を許す言語だか，その一方で動詞句省略も許すと言える（cf. Otani and Whitman 1991）。したがって，これまで仮定してきた日本語と英語の違いを見直し，獲得過程を（22）に修正する必要がある。

(22)



つまり，日本語と英語の省略構文の解釈の違いは，一方が動詞句省略を許し，一方が名詞句省略を許す，というものではなく，名詞句省略が許されるか許されないか，という違いにより説明されるのではないか。したがって，名詞句省略が許されるから動詞句省略は許されない，とか，名詞句省略が許されないから動詞句省略は許される，などの議論は誤っていることになる。つまり，名詞句省略が許されるか許されないか，という問題と，動詞句省略が許されるか許されないか，という問題は，別問題として捉えるべきである。

以上の考えに基づくと，本研究において参照してきたOku（1998）の提案も，再検討する必要がある。Oku（1998）によれば，その言語において動詞の素性が強いと，動詞句省略が許され，弱いと名詞句省略が許される，となるが，もし，動詞の素性が弱い日本語においても動詞句省略があるとすれば，なぜ動詞句省略が許されるのか，本当に動詞の素性により説明されるのか，疑問が残る。さらにこの疑問は，入力としての言語情報についての提案についても疑問を投げかける。したがって，かきまぜ構文と省略構文に関連があるのか否かも，再検討する必要がある。

表4　言語間の違い（Takahashi 2010）

	素性	かきまぜ	省略構文	副詞の解釈
日本語	弱	許す	名詞句省略	日本語タイプ
韓国語	弱	許す	名詞句省略	日本語タイプ
英語	強	許さない	動詞句省略	英語タイプ
中国語	強	許さない	動詞句省略	**日本語タイプ**

5.2.　刺激文の選定

副詞を含んだ省略構文の解釈が，名詞句省略と動詞句省略の違いを捉える適切な基準となるかどうかも，問題として残っている。その理由として，（23）の中国語の主語省略構文の解釈が挙げられる。

（23）中国語の主語省略構文の解釈

a. Zhangsan　shuo [　ziji　de　haizi　mei　na　qian　].
Zhangsan　say　self　GEN　child　take　not　money
'Zhangsan said that [his child did not take money].'

b. Lisi　ye　shuo　[____　mei　na　qian　].
Lisi　too　say　take　not　money
'Lisi also said that [____ did not take money].'
Lisi も［**Zhangsanの子ども**がお金を受け取らなかった］と言った。

（Takahashi 2008: 415）

中国語の主語省略構文では，（23b）で示されているように省略部分の解釈は，必ず先行文と同じ解釈でなければならない。2.1.の（6）で挙げた日本語の主語省略構文の解釈と比較すると，日本語とは異なる解釈である。このことから，中国語は日本語のように名詞句省略をもつ言語ではなく，動詞句省略をもつ言語であると言える。しかしその一方で，副詞を含んだ省略構文の解釈は，日本語と同じ解釈になる。したがって，表4でまとめた言語間の違いからもわかるように，副詞を含んだ省略構文の解釈が，名詞句省略と動詞句省略の違いを正しく捉えていない可能性がある。

さらなる問題点として，4.2.で述べたように，副詞を含む刺激文の解釈があいまいであり，対象言語を母語とする者からですら，期待する解釈を引き出しにくい，という点が挙げられる。したがってL2獲得者の文法知識を適切に引き出せたかどうか，疑問が残る。今後はこの点に配慮し，刺激文の選定を行う必要がある。

そこで，日本語の名詞句省略構文の解釈について調査するにあたり，次に行う実験では，動詞句省略の解釈の可能性がない刺激文を用いる必要がある。現時点で検討している刺激文として，以下のものがある。

（24）a.　太郎が二冊の本を読んだ。
b.　花子は____読まなかった。

b'.　花子は**それらを**読まなかった

(24b)の解釈は，（24b'）の解釈との対比で捉えるとわかりやすい。（24b）の解釈には少なくとも「花子は太郎が読んだ二冊の本を読まなかった」と，「花子は（何の本でもいいが）二冊の本を読まなかった」の二つがある。これは，日本語が名詞句省略を許す，ということを示す。一方（24b'）には，前者の解釈しかない。（24b）と（24b'）の解釈の違いを理解しているかどうかを，日本語獲得者を被験者として調査することにより，獲得者が無意識的にもつ文法知識を，うまく引き出せると考える。

注

1) L2とは，母語を獲得後，または獲得途中に獲得する母語以外の言語を指す。
2) L2を身につける環境によって，「獲得」と「学習」を区別して使用する場合もあるが，本計画書では両者に本質的な違いはないと考えるため，両者を合わせて「獲得」と呼ぶ。
3) このような状況を「刺激の貧困の状況」と呼び，この状況があるにもかかわらず，なぜかくも豊かな文法知識を子どもが持っているのか，という問題を「言語獲得における論理的問題」（e.g. Hornstein and Lightfoot 1981）と呼ぶ。
4) Sugisaki (2009)で使用しているテスト文は以下の二種類である。
   (i) a.　ゾウさんは　［自分の絵が一番上手だと］　思っているよ。
   　　b.　ライオンさんも　［____　一番上手だと］　思っているよ。
   (ii) a.　ゾウさんは　［自分の絵が一番上手だと］　思っているよ。
   　　b.　ライオンさんも　［**それが**　一番上手だと］　思っているよ。
5) Otaki and Yusa（2010）でも，日本語を母語とする子どもが日本語の目的語省略構文を正しく理解できるかどうかを，Sugisaki（2009）とは異なる刺激文を用いて調べている。その結果，Sugisaki（(2009）と同じように，平均年齢5歳2日の子どもが日本語の目的語省略構文を正しく理解していることが示された。
6) 刺激文に含まれる日本語の語彙は，『平成19・20年度日本語能力検定試験―試験問題と正解3・4級―』（凡人社）より選定した。
7) ある形式が文法的ではないという情報を獲得者が取り込み，それを文法獲得のために用いた場合，その情報を否定証拠と呼ぶ。
8) ある形式が文法的であるという情報を獲得者が取り込み，それを文法獲得のために用いた場合，その情報を肯定証拠と呼ぶ。
9) 例文の前にある“*”は，その例文が非文法的な文であることを示す。
10) この被験者は予測と合致しないが，単文でのかきまぜ構文に対する正答率は90%を越えていたことから，かきまぜ構文についての知識ではなく，埋め込み文についての知識が欠如していた可能性がある。

参考文献

Bley-Vroman, Robert. 1990. The logical problem of foreign language learning. *Linguistic Analysis* 20, 3–49.

Bley-Vroman, Robert. 2009. The evolving context of the fundamental difference hypothesis. *Studies in Second Language Acquisition* 31, 175–198.

Boškoviš, Željko. and Daiko Takahashi. 1998. Scrambling and last resort. *Linguistic Inquiry* 29, 347–366.

Chomsky, Noam. 1975. *Reflections on Language*. New York: Pantheon.

Crain, Stephen. 1991. Language acquisition in the absence of experience. *Behavioral and Brain Science* 14, 597–650.

Crain, Stephen and Rosalind Thornton. 1998. *Investigations in Universal Grammar: A guide to experiments on the acquisition of syntax and semantics*. Cambridge, Massachusetts:MIT Press.

Curtiss, Susan. 1977. *Genie: A Psycholinguistic Study of a Modern-Day "Wild Child"*. London: Academic Press.

Duffield, Nigel G. and Ayumi Matsuo. 2009. Native speaker's versus L2 learners' sensitivity to parallelism in VP-ellipsis. *Studies in Second Language Acquisition* 31, 93–123.

Hornstein, Norbert and David Lightfoot. 1981. Introduction. In *Explanation in Linguistics: The logical problem of language acquisition*, N. Hornstein and D. Lightfoot (eds.), 9–31. London and New York: Longman.

桃生朋子. 2009.「第二言語獲得」. 石崎俊・池原悟・中川裕志・橋田浩一・長尾真・田中穂積・坂原茂・徳永健伸・丹羽芳樹・森辰則（編）.『言語処理学事典』, 754–755. 東京：共立出版.

Oku, Satoshi. 1998. A Theory of Selection and Reconstruction in the Minimalist Perspective. Ph.D. Dissertation, University of Connecticut.

Otaki, Koichi and Noriaki Yusa. 2009. The sloppy-identity interpretation in child Japanese: Its acquisition and implications. In The Proceedings of the Tenth Tokyo Conference on Psycholinguistics, Y. Otsu (ed.), 193–214. Tokyo: Hituzi Syobo.

Otani, Kazuyo and John Whitman. 1991. V-Raising and VP-Ellipsis. *Linguistic Inquiry* 22, 345–358.

Otsu, Yukio. 1981. *Universal Grammar and Syntactic Development in Children: Toward a Theory of Syntactic Development*. Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Massachusetts.

Otsu, Yukio. 1994. Early acquisition of scrambling in Japanese. In *Language Acquisition Studies in Generative Grammar*, T. Hoekstra and B. D. Schwartz (eds.), 253–264. Amsterdam: John Benjamins.

Saito, Mamoru. 2007. Notes on East Asian argument ellipsis. *Language Research* 43, 203–227.

Schachter, Jacquelyn. 1990. On the issue of completeness in second language acquisition. *Second Language Research* 6, 93–124.

Schwartz, Bonnie D. and Rex Sprouse. 1996. L2 Cognitive states and the Full Transfer/Full Access model. *Second Language Research* 12, 40–72.

Song, Suk H. and Bonnie D. Schwartz. L2 adult, L2 child, and L1 child comparisons in the acquisition of Korean wh-constructions with negative polarity items. *Studies in Second Language Acquisition* 31, 323–361.

Sugisaki, Koji. 2007. The Configurationality Parameter in Minimalist Program: A View from Child Japanese. In *Proceedings of the 31st Annual Boston University Conference on Language Development*, H. Caunt-Nulton, S. Kulatilake, and I. Woo (eds.), 597–608. Somerville, Massachusetts: Cascadilla Press.

Sugisaki, Koji. 2009. Argument ellipsis in child Japanese: A preliminary report. In *The Proceedings of the Tenth Tokyo Conference on Psycholinguistics*, Y. Otsu (ed.), 291–32. Tokyo: Hituzi Syobo.

Takahashi, Daiko. 2008. Noun phrase ellipsis. In *The Oxford Handbook of Japanese Linguistics*, S. Miyagawa and M. Saito (eds.), 394–422. Oxford: Oxford University Press.

Takahashi, Daiko. January, 2010. Argument ellipsis, anti-agreement, and scrambling. Draft, Tohoku University.

White, Lydia. 2003. *Second Language Acquisition*. Cambridge: Cambridge University Press.

White, Lydia, Makiko Hirakawa and Takako Kawasaki. 1996. Second language acquisition of long distance reflexives: Effects and non-effects of input manipulation. *McGill Working Papers in Linguistics* 2, 129–152.

財団法人日本国際教育支援協会・独立行政法人国際交流基金（編・著）. 2009.『平成19年度日本語能力検定試験―試験問題と正解3・4級―』. 東京：凡人社.

財団法人日本国際教育支援協会・独立行政法人国際交流基金（編・著）. 2010.『平成20年度日本語能力検定試験―試験問題と正解3・4級―』. 東京：凡人社.